石川 ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

# れきはく

No.135
2021.6.25

# 大加州刀展

令和3年度 夏季特別展

2021 7/22(木祝)▷9/12(日)

右：白澤打刀拵（石目地雪花文鞘半太刀拵） 江戸時代末期（19世紀） 個人蔵
左：短刀 銘［表］奉 志津兼氏後胤辻村兼若／主命巌潔斎鍛加金恭造之
［裏］今枝民部源直方／當家嫡流之守護／享保丁酉孟冬穀旦
［棟］伯仲叔之叔刀
江戸時代中期 享保２年（1717） 四代兼若 今枝家伝来 個人蔵

令和3年度 夏季特別展

# 大加州刀

7/22(木・祝)▶9/12(日) 9:00～17:00
(チケットの販売は16:30まで)

前期 7/22(木・祝)▶8/17(火) 後期 8/19(木)▶9/12(日)

※展示替えによる休室日 8月18日(水)

場所 石川県立歴史博物館 特別展示室・企画展示室

混雑時には、15:30までにチケット売り場にお並びいただいた方のみのご入場となります。
イベントの開催などに応じて、開館時間を延長する場合があります。
COVID-19の感染状況、混雑状況などに応じて、入場の条件を変更する場合があります。
(詳細は公式HP、公式Twitter等でご確認ください)

## 加賀を代表する刀工たち

古刀

### 真景 Sanekage

真景は加賀最古級の流派で、南北朝時代の作が確認されています。越中国の則重の門人と伝えられるものの、活動時期に開きがあるため、直伝ではなく間接的に影響を受けたものとみられます。

重要刀剣

短刀　銘　藤原真景　　一般財団法人 秋水美術館蔵
貞治六年二月日
南北朝時代　貞治6年（1367）

製作年紀の知られる真景の基本作です。地沸よくつき、かねが黒味を帯びることなど北国物特有の肌合いがみられます。また、焼刃が厚く沸づき、金筋・砂流しがさかんにかかるなど、則重伝を継承した特色をうかがうことができます。

古刀～新刀

### 家次 Ietsugu

越前国の千代鶴派の流れを汲むとみられる流派です。室町時代中期に越前国から加賀にやってきた国次の子・家次が初代で、能美郡能美村（小松市能美町）の橋爪に居住したと伝わります。

刀　銘　加州藤原住家次作　　石川県立歴史博物館蔵
大永貳年八月吉日
室町時代中期～後期　大永2年（1522）

茎に年紀が入っており、製作年のわかる貴重な作です。地肌は所々白んでおり、これは「白け」といって、橋爪系にはよく見られます。変化の多い刃文で、見ごたえのある一振りです。

古刀～新刀

### 友重 Tomoshige

友重は「藤嶋友重」ともいい、越前国藤嶋から加賀国へやってきた流派です。活動は鎌倉時代末期の古刀期から江戸時代前期の新刀期に及びます。初代は山城国の来国俊の門下と伝わりますが、作風は大和物の系統を引いているようです。

重要刀剣

刀　銘　藤嶋友重　　一般財団法人 秋水美術館蔵
室町時代初期（15世紀）稲葉家伝来

刃文は乱れたり、角ばったり、尖ったり、あるいは小のたれや丁子風など多種の刃が入り交じっており、また金筋や砂流しがさかんにかかっています。これらの点は、備前と美濃の両要素が混在していることを示しており、藤嶋友重の一傾向を示す典型作のひとつに数えられています。

古刀～新々刀

### 陀羅尼系 Darani-kei

橋爪系から枝分かれした流派で、代表的な刀工に勝家や家忠、家重がいます。刀剣を鍛える際、尊勝陀羅尼の秘呪を唱えて作刀し、銘にも陀羅尼と刻んだため、陀羅尼鍛冶と呼ばれました。

刀　銘　□□□□御寄進依　仰奉作之／加州住藤原家重造　　個人蔵
承応三年八月　日
江戸時代前期　承応3年（1654）

加賀藩前田家三代利常が孫の綱紀の武運長久を祈るため、加越領内に居住する22人の刀工に作刀させ、承応3年（1654）8月、高岡の瑞龍寺に寄進した刀のうちの一振り。これを瑞龍寺奉納刀といい、現在するのはわずか2口です。三代家重の作で、家重は寛文元年（1661）伊予大掾を受領し橘勝国と改銘しました。

# 展

# 古刀期から新々刀期まで、加州刀80余点が大集合！併せて拵の逸品も公開します。

刀　銘　[表] □□□□御寄進依　仰奉作之／加州住藤原家重造　[裏] 承應三年八月　日
江戸時代前期　承応３年（1654）　個人蔵

加州刀とは、加賀国で鍛えられた刀のことを指します。古刀期の加州刀は南北朝時代の「真景」や「藤嶋友重」らにはじまり、室町時代中頃からは橋爪系や「清光」の活躍がみられました。江戸時代初期に新刀期を迎えると、美濃から初代兼若が当地に移り、変化の多い相州伝や華麗な備前伝を取り入れた刃文で一世を風靡します。その後加州刀は停滞期を迎えますが、寛政頃に新々刀期を迎えると再度盛り返し、「清光」や「木下兼久」らが需要を支えました。本展では、加賀を彩った名刀の数々を一挙に展示し、その歴史と魅力に迫ります。

古刀～新々刀

## 清光
Kiyomitsu

清光は室町時代に友重から分かれた流派です。特に江戸時代前期の長兵衛清光は有名で、困窮の末加賀藩の貧民救済施設に入り、そこで作刀しました。明治時代まで連綿と続き、加州刀では最長の流派となりました。

刀　銘　清光　　浄照寺蔵
江戸時代前期（17世紀後半）

長兵衛清光の作。代数は暫定ですが古刀期から数え六代目にあたると目されます。当時は人気の高かった刀工で、本刀のように刃文は直刃が圧倒的に多く、ほか互の目に丁子刃を交えた華やかな出来も見られます。

新刀

## 兼若
Kanewaka

新刀期の加賀を代表する一門で、初代は江戸時代初期に美濃国よりやってきました。作風は変化の多い華やかな相州伝、華麗な備前風の逆丁子乱れを取り入れた、美しい刃文に特徴があります。

刀　銘　越中守藤原高平（花押）　　石川県立美術館蔵
元和七年十二月　日（初代　辻村兼若）
江戸時代初期　元和７年（1621）

石川県指定有形文化財

初代兼若の高平改銘後の作。沸と呼ばれる、目に見える大きさの鉄粒子が地肌全体に浮かび、見事な出来栄えの一振りです。晩年になっても衰えない初代兼若の確かな実力がうかがえます。

## 古　刀 → 新　刀 → 新々刀

**古　刀**
中世末期までに作られた刀の総称。太刀や刀のほか、古代に見られる直刀も含む。古刀期の加州刀は、鎌倉～南北朝時代頃より姿を見せはじめる。

**新　刀**
江戸時代に作られた刀の総称。狭義には寛政頃（1789-1801）までに打たれたものを指す。古刀に比して重量が大きい傾向がある。

**新々刀**
寛政頃から江戸時代の終わりまでに作られた刀のこと。18世紀後期になると刀鍛冶が少なくなり、刀の質も下落。これを打開するため、南北朝時代～室町時代初期頃の古刀を復興しようと生まれた。

## イベント情報

### 記念講演会「加州の名刀を語る」　要事前申込　無　料
日時：7月24日（土）13:30～15:00
講師：渡邉　妙子 氏（公益財団法人 佐野美術館理事長）

### 展示解説　当日先着順　要特別展チケット／半券
日時：8月　7日（土）13:30～14:30
講師：小浦　宗五郎 氏（公益財団法人 日本美術刀剣保存協会会員）
日時：8月28日（土）13:30～14:30
講師：北　春千代（当館 学芸主幹）

### 正伝 長尾流躰術演武　当日先着順　無　料
日時：8月　8日（日・祝）①10:00～　②11:00～　③13:30～
演武者：金沢工業大学 正伝 長尾流躰術部

観覧料
一　般：1,000(800)円
大学生・高校生：800(640)円
中学生以下：無料
※(　)内は20名以上の団体料金
65歳以上の方は団体料金

主　　催：石川県立歴史博物館
特別協力：北國新聞社　株式会社大塚巧藝社
協　　力：日本美術刀剣保存協会石川県支部
株式会社ニトロプラス

イベントの詳細は当館HPまたはチラシをご覧ください。

資料紹介

# 兼若一門

学芸主幹　北　春千代

新刀期に入り、美濃国から加賀国に移住してきたのが辻村兼若一族です。

初代兼若は甚六といい、慶長12年（1607）銘の脇指や、同14年（1609）銘の刀などが加州打ちの初期作品として知られています。以後、元和５年（1619）まで六字銘を中心とした兼若銘を切りますが、元和７年（1621）に「越中守」を受領し「高平」と改め、寛永５年（1628）まで作刀しています。初代兼若の初期の刃文は、互の目（丸みを帯び連続する刃文）乱れ、足入り、匂深く、小沸よくからみ、砂流し掃きかけ、ときに金筋も現れます。中頃以後は、小乱れ、互の目丁子や、大乱れなど華やかなものもみられ、稀に直刃、大のたれ、関風の尖った互の目乱れもあります。

初代兼若の長男は「景平」です。四郎右衛門といい、生没年に関し判然とした記録はなく、寛永５年（1628）から打ち始め、同20年（1643）までのものが知られています。正保（1644-48）･慶安（1648-52）の間は不明で、承応３年（1654）８月吉日の瑞龍寺奉納刀がありますが、これは弟の又助の代作とみられています。景平は、直刃、互の目乱れが多く、逆丁子乱れもありますが。主として匂い本位で、刃縁冴えのないものが多く、稀に沸つき華やかなものもあります。

初代兼若の次男を「有平」といいます。俗名や生没年は不明ですが、「越後守」を受領しています。年紀銘のあるのは寛永12年（1635）の脇指、正保４年（1647）の刀があり、作品は兄・景平とともに多くありません。有平は、大のたれ、互の目、丁子乱れ、直刃など種々ありますが、沸つき華やかなものが割と見られます。

初代兼若の三男を「又助」といいます。慶長15年（1610）に生まれ、兄・景平の養子となり、「兼若」を襲名し、二代兼若に数えられます。寛永５年（1628）から打ち始め、延宝５年（1677）正月68歳で没しています。比較的多くを数え、中でも脇指がよく見られます。二代兼若は、互の目乱れ、箱乱れ、直刃、逆丁子乱れなど種々の刃文を得意としています。

初代兼若の四男を「清平」といい、五郎右衛門を称しました。元和６年（1620）に生まれ、金沢で青年時代を過ごし、後に江戸に出て、承応２年（1653）にはその地で打ち始め、さらに相州の稲葉家に召されて小田原八幡山に住みました。貞享２年（1685）、稲葉家の転封により再び江戸に移っています。没年は不明で、元禄15年（1702）の遺作があります。清平は、大のたれ、互の目丁子、直刃などありますが、尖り気味の刃がどこかに交じり、そして沸つき華やかなものが多くあります。

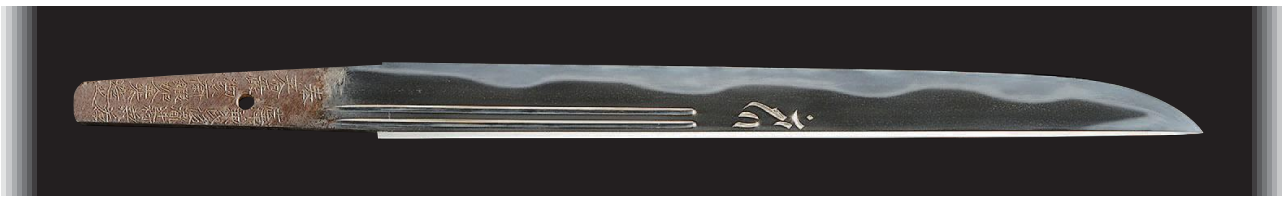
清平の嫡子を清兵衛といい、寛文２年（1662）、江戸に生まれました。最初、守平と称し、後に清平を名乗り二代目となりました。父・清平との合作も知られます。没年は不詳です。

二代兼若の長男を四郎右衛門といいます。三代「兼若」で、寛文元年（1661）頃より打ち始め、宝永８年（1711）に没しています。箱乱れ、のたれ乱れに玉焼を焼いたもの、砂流し華やかな洲浜乱れ、あるいは逆丁子乱れ、互の目乱れ、直刃も稀にあります。刃文の巧妙さは歴代兼若中随一です。

二代兼若の次男を傳右衛門といいます。慶安４年（1651）に生まれ、元禄２年（1689）、「高平」を名乗り、「出羽守」を受領しましたが、没年は不詳です。箱乱れ、箱乱れに玉を交えたもの、砂流し華やかなものなど、総じて匂い沸深く、ときには荒沸つくものもあり、稀に直刃もあります。刃文の華やかさは兼若一族中第一とされます。

三代兼若の長男を甚太夫といいます。四代兼若で、貞享３年（1686）より打ち、正徳元年（1711）から元文４年（1739）頃にかけ活躍しました。箱乱れ、互の目乱れ、直刃もありますが、沸の深いものは焼頭が堅いです。

五代兼若は助太夫といいますが作刀は見ません。



短刀　銘　奉　志津兼氏後胤辻村兼若／主命嚴潔斎鍛加金恭造之
今枝民部源直方／當家嫡流之守護／享保丁酉孟冬穀旦
棟銘　伯仲叔之叔刀
江戸時代中期　享保２年（1717）
四代兼若
今枝家伝来
個人蔵

学芸員コラム
Column

# 当館における虫害対策

学芸主任　岡崎　道子

博物館の大敵は、虫やカビなどの有害生物です。これらから資料を守るために、博物館では様々な対策を設けています。今回は、当館で行っている対策についてご紹介します。

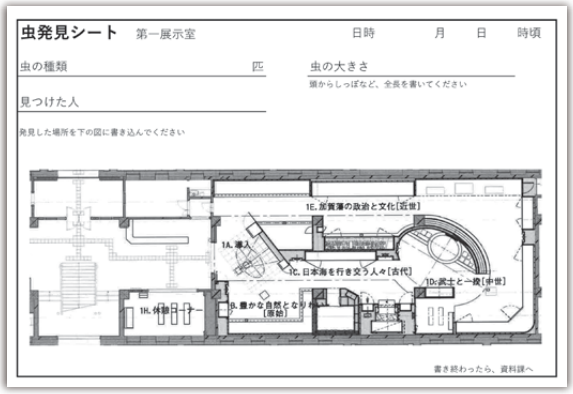
有害生物への対応は、虫やカビが発生しないような環境づくりをして、発生してしまったら燻蒸、という方向で行っています。このため、まず博物館に有害生物を入れないことを第一に考えます。例えば虫の場合侵入ルートは、資料についてくるパターン、虫が自力で入ってくるパターンの大きく二つに分かれます。資料についていた場合、そのまま収蔵庫に入れてしまうと、収蔵庫内で虫害が発生してしまいます。これを防ぐために、収蔵庫に入れる前に資料を点検し、必要があれば殺虫処理や燻蒸をする必要があります。また虫の展示室・収蔵庫への侵入を阻止するためには、外と展示室・収蔵庫との距離をできるだけ離さなければなりません。博物館として設計された建物の多くは、建物の入り口と展示室・収蔵庫が離れており、開口部から虫が侵入しても、容易には資料にたどり着けないようになっています。

ところが当館はリノベーション施設であり、初めから博物館として設計されていないため、入り口と展示室との距離が近く、距離による虫の排除が困難です。そこで重要になってくるのが、館内を定期的に観察し、虫の早期発見に努めることです。当館では館内で虫を見かけたらすぐに資料課担当者に連絡することになっています。集まった虫の発見報告は都度記録しており、これによって、どんな虫が増えているのか把握し、対策がとれるようになっています。

さて、有害生物には虫だけでなくカビも含まれます。カビの菌は比較的どこにでも存在し、空気中を漂っているので、これの侵入を防ぐのは容易ではありません。しかしカビは空気環境を整えてやれば発生しませんので、湿度管理と定期的な清掃によって予防することができます。当館の特別収蔵庫は湿度を55％RHに設定しており、扉の開閉を制限することで、設定値通りの湿度管理を実現しています。また定期的な清掃によって菌の数をきわめて少なくし、理想的な環境を維持しています。

しかしながら、当館の収蔵庫全てがこの環境を実現できるわけではありません。これもリノベーション施設ゆえの制限です。収蔵庫の中には密閉度が低く、湿度管理の難しいものもあります。そこで実施しているのが定期的な清掃です。カビの発生条件はいくつかありますが、そのうちの一つに豊富な栄養分が挙げられます。収蔵庫における栄養分とはつまり、ホコリや虫です。これらを除去してやることでカビの発生を未然に防ぎ、万が一発生してしまっても、早期発見・対応ができるようにしています。

虫の早期発見は一人一人が気を付けることで可能になりますし、広い収蔵庫の定期清掃も、多くの手を借りることで達成できます。リノベーション施設におけるIPMの実践には困難が多いですが、博物館で働く一人一人の理解と協力を得ることで実現できています。


虫発見シート　第一展示室　日時　月　日　時頃
虫の種類　匹
虫の大きさ
頭からしっぽなど、全長を書いてください
見つけた人
発見した場所を下の図に書き込んでください
1E. 近畿藩の政治と文化【近世】
1A. 導入
1C. 日本海を行き交う人々【古代】
1D. 武士と一揆【中世】
1H. 休憩コーナー
1B. 豊かな自然となり合う（原始）
書き終わったら、資料課へ

展示室を見回るスタッフには「害虫発見シート」を渡して、虫のいた場所や大きさをメモし、提出してもらっています。

研究ノート

# 金沢の盛り場は夕涼みから生まれた

学芸主幹兼学芸課長　大門　哲

## 一、長町の鬼蚊

昔の夏は涼しかったという声をよく聞く。確かに今のように気温35度超えが連日続くことはなかった。しかし、過ごしやすかったとはいえない。冷房機器で簡単に涼をとることができなかったからである。

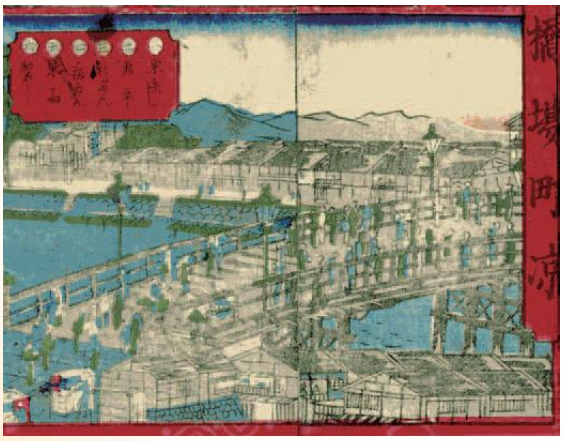
もっとも身近な冷房機器といえる扇風機が石川県に広まるのは大正６年（1917）。当時は電気会社からのレンタルが一般的で、利用したのは主に貸座敷や銭湯だった。昭和初期には富裕層に拡大する。しかし利用の機会は風呂上りのみだったという（那谷敏朗『幼事然々』）。

扇風機がない時代、暑さとは堪えるものだった。藩政期の日記をひもとこう。「鶴村日記」や「応響雑記」など加賀藩領内の記録をみると、「暑さに堪えず」という記述が頻出する。ただし、さすが武家である。「天保日記」（当館蔵）や「起止録」などの日記類には弱音はみえず、「湯あみ」・「行水」が淡々と書き留められる程度である。

暑さに堪えられない日が続けば、とうぜん体調を崩した。「鶴村日記」には、夏場になると「吐瀉」の二文字がしばしばみえる。亡くなる人も多かった。昭和初期の新聞は猛暑による死者の激増を報じている。このような過酷な生活環境のなか、藩政期に発達したのが土用見舞である。土用の頃、土用餅（豆をまぶした餅）・ボラ寿司・饅頭・ニシンなどを土産に知己や親戚の家を見舞った。

家の中に風を通すために一日中、板戸をあけひろげておく。当然、蚊が出入りし放題であった。蚊の巣窟となったのが便所である。金沢の俳人杉原竹女の随想「夕涼み」（『あらうみ』昭和33年）には群がる蚊をおい払うために団扇を携帯したとみえる。

面白いことに金沢にはかつて蚊の産地と信じられた町があった。武家屋敷で有名な長町である。「鶴村日記」の文政２年（1819）閏４月20日の記載には「夜前暑甚し蚊の声初て聞　長町抔は三十日前ゟ蚊帳ヲ吊ると云、此辺蚊なし」とある。長町からまず蚊が発生し、周辺にひろがっていくと信じられていたのである。このような評判の積み重ねの結果だろう。明治に入ると、市街地では蚊を「長町の鬼蚊」と呼んで嫌った。



「橋場町涼」「金澤勝地賑双六」（当館蔵）より

賑わう片町方面（絵葉書）　1920代か

## 二、夏の夜の遊歩

憂鬱だったのが夜である。天井の低い町屋の中は暑さが抜けず、家にいても体が休まらなかった。「鶴村日記」には「今夜甚あつし家々皆往来へ出て涼ヲ取る寝かたし」（文政９年６月25日）とある。いたたまれず、往来で過ごしたとわかる。このような暮らしのなか、なるべくして人々がうみだした生活技術が夕涼みであった。

金沢の夕涼みは、家の前の小路に縁台をおき将棋を楽しむような、そんなのどかなものではない。明治30年代の金沢市唱歌に「夏の夕べは大橋のたもとの風にふかれつつ」という一節があるように、夕食を終えると、犀川や浅野川の大橋附近にこぞって出掛けた。

橋の欄干にもたれかかり、涼やかな川風をあびたのである。橋の上から眺める夜景も疲れを癒した。浅野川大橋からは卯辰山が目の前に迫る近景の美を、かたや犀川大橋からは遠くの山影や高台の灯火が織りなす遠景の美をめでた。

ではいつから大橋付近へ繰り出すようになったのだろうか。多くの人々で賑わいをみせるのは延享年間（18世紀半ば）から。藩はくりかえし「夜行」を禁じた（『加賀藩史料』第５編・『加賀藩御定書』後編）。

夕涼みが生活技術という枠組みを超えて夏の遊楽へと発展していく画期となったのが文政２年（1819）。このころ、藩は経済の活性化のため、廓や芝居を公認したが、それと連動して夏の「夜店」営業が始められた。人々の目的は納涼にかこつけての消費となっていったのである。

当時の夜店の種類については文政６年（1823）の紀行文「三の山巡」が詳しい（加藤基樹「「三禅定」考―成立と『三の山巡』にみる実態―」）。路傍で飴・桃が売られ、小間物屋は表戸をあけ行灯をともし、菓子・小間物などの露店は「あて物」（射幸）をして客の気を引いたとみえる。その後、夕涼み客を目当てに見世物や大道芸などの興行が河原で盛んに行われるようになり、夏の夜の大橋付近は祝祭的な様相をみせていく。

明治10年（1877）頃の犀川大橋の夏の夜の風景は郷土史家の森田柿園「犀水納涼記」が活写している。橋の上は雑沓で満ち、下は忘れ物が散乱し、また若い男性が行きかう女性を品定めしていたなどと記す。柿園のしかめ面が浮かぶ。その目には夕涼みは堕落した世界にみえたのである。

## 三、移り行く繁華

夕涼みの勢力図が変化していくのは明治後半。それまで夕涼みの中心といえば、浅野川大橋付近、とくに掛作りの通称で知られた橋場町であった。江戸後期の「浅野川四季風俗図」は付近の賑わいを繊細な筆致で描き、明治11年（1878）「方今有名金澤参幅對」は金沢の三大繁栄地のひとつに「掛作納涼」をあげ、明治27年（1894）「金澤勝覧図誌」は「浅野川大橋納涼」の挿絵をのせる。そこは金沢の繁栄を象徴する場でもあった。金沢の名所を双六にした明治10年代の「金澤勝地賑双六」は「橋場町涼」を振り出しにおいた。

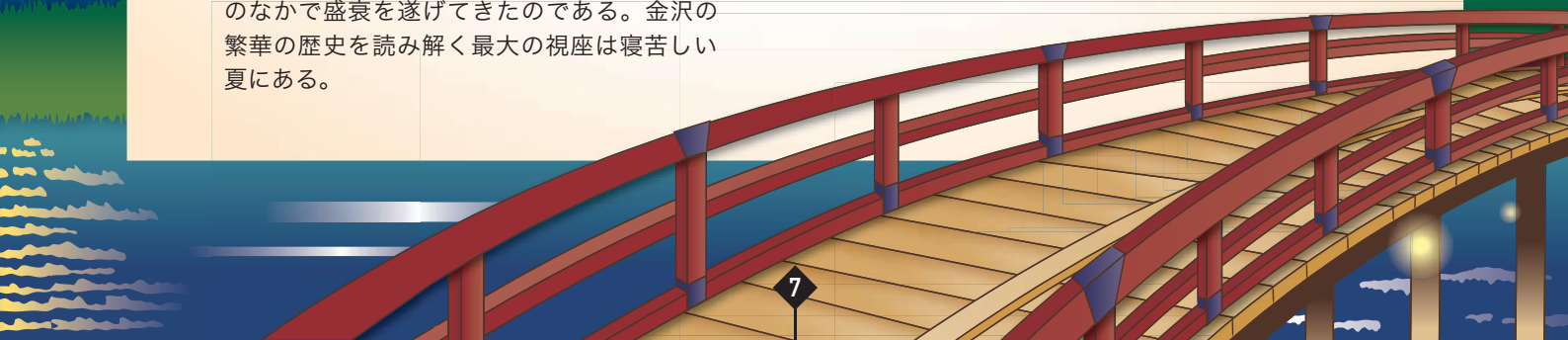
明治30年代に入ると浅野川口の繁華に陰りが出てくる。きっかけは維新以後、武家の転出により空地となっていた香林坊高（現・東急スクエア）の開発による。明治20年（1887）、片町方面の夜店への客寄せのため、片町・石浦町の有志が仕掛け花火や余興を催した。

翌年以降、同地に大神宮が誘致され、さらに芝居小屋や寄席が並び立つようになる。また宮の境内地には屋台がならび、また見世物や大道芸が一年を通し行われるようになった。夕涼みシーズンだけ河原が興行地となる浅野川大橋付近と違い、香林坊では年間を通し様々な娯楽を楽しめた。常に賑わう場所へ足が向くのは自然の流れであった。

大正年間になると、夕涼みの勢力図がさらに変化をみせる。市街鉄道敷設により、街路が整備され、移転にあわせ店舗が洋風建築へ改良されることで、屋台での衝動買いや見世物見物ではなく、ウィンドウショッピングに楽しみを見出すようになるのである。遊歩の聖地となったのがモダンな店が数多くならぶ片町であった。

大正12年（1923）頃には銀ブラをもじった片ブラという言葉がはやり出す。遊歩の時間は銀ブラに規定はないが、片ブラは夏の夜と決まっていた。片ブラとは夕涼みのモダン語なのである。片町に人気が集中することで、かつて隆盛を誇った香林坊は時代遅れの猥雑な場と見なされ、大正末頃から繰り返し「改造」計画が持ちあがるようになった。

橋場町から香林坊、さらに片町へ。金沢の盛り場は夕涼みをめぐる近世から近代にいたる人々の欲望の変化のなかで盛衰を遂げてきたのである。金沢の繁華の歴史を読み解く最大の視座は寝苦しい夏にある。



## 催し物案内 Information

展示解説や各種講座などの情報をお知らせします。
※各種催し物の詳細については、当館ホームページにてお知らせします

### 7月　休館日：7/19(月)～21(水)

| | |
|---|---|
| 9日(金) | **いしかわ歴史講座**<br>「加賀藩政下の『マネーゲーム』」<br>講師：濱岡 伸也 |
| 17日(土) | **れきはくゼミナール**<br>「夕涼み－金沢最長の祝祭－」<br>講師：大門 哲 |
| 24日(土) | **「大加州刀展」記念講演会**<br>「加州の名刀を語る」<br>講師：渡邉 妙子 氏<br>（公益財団法人 佐野美術館理事長） |

### 8月

| | |
|---|---|
| 7日(土) | **「大加州刀展」展示解説**<br>講師：小浦 宗五郎 氏（公益財団法人 日本美術刀剣保存協会会員） |
| 8日(日・祝) | **正伝 長尾流躰術演武**<br>演武者：金沢工業大学 正伝 長尾流躰術部 |
| 21日(土) | **れきはくゼミナール**<br>「加州刀の魅力」　講師：北 春千代 |
| 27日(金) | **いしかわ歴史講座**<br>「加賀前田家と江戸幕府」　講師：塩崎 久代 |
| 28日(土) | **「大加州刀展」展示解説**<br>講師：北 春千代（当館 学芸主幹） |

**「大加州刀展」記念講演会**　無料　要事前申込

**「大加州刀展」展示解説**　要特別展チケット／半券・当日先着順

**正伝 長尾流躰術演武**　無料　当日先着順

**いしかわ歴史講座**
毎月1～2回、金曜日に実施。当館学芸員が、常設展示の内容を中心にお話します。
受講無料　当日先着順　全12回

**れきはくゼミナール**
毎月1～2回、土曜日に実施。当館の学芸員が独自のテーマを設定し講義します。
受講無料　当日先着順　全12回

## 次回展覧会のお知らせ

石川県立歴史博物館開館35周年記念｜令和3年度秋季特別展

# 徳川美術館展 尾張徳川家の至宝

尾張徳川家は、徳川家康の九男義直（よしなお）に始まる御三家筆頭の大名家で、名古屋城を居城とし、江戸時代を通じて徳川将軍家に次ぐ家格を誇りました。

本展では、名古屋の徳川美術館に伝来した家康の遺産「駿府御分物（すんぷおわけもの）」や歴代当主、夫人の所用品に加え、同館のコレクションの中から選び抜いた名品を紹介します。とりわけ「源氏物語絵巻」（国宝）は徳川美術館以外では巻子装への修復後初めての特別公開であり、三代将軍家光の娘千代姫の調度「初音の調度」（国宝）は金銀の蒔絵が施された華麗な婚礼調度です。また、前田綱紀から五代将軍綱吉に献上された太刀「津田遠江長光」（国宝）をはじめ、加賀前田家ゆかりの貴重な品々も一堂に会します。

源氏物語絵巻　東屋(一)　平安時代(12世紀)　国宝　徳川美術館蔵

**令和3年(2021) 10/9(土)～11/23(火・祝)**

〔展示期間：11/8～11/23〕

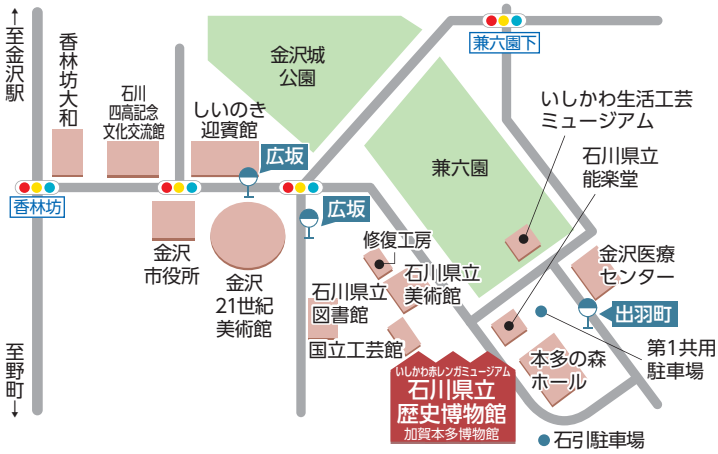
〔源氏物語絵巻の展示替え予定〕
国宝　源氏物語絵巻　竹河(二)　10/9(土)～10/24(日)
国宝　源氏物語絵巻　東屋(一)　11/8(月)～11/23(火・祝)
＊10/25(月)～11/7(日)は、復元模写・現状模写の展示になります。

前期：10月9日(土)～10月31日(日)
後期：11月2日(火)～11月23日(火・祝)

※11月1日(月)は展示替えのため閉室

本展公式ホームページ

＊7/10(土)より前売チケットを販売いたします。詳細は本展公式ホームページをご覧ください。




いしかわ赤レンガミュージアム
**石川県立歴史博物館**
ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-1
TEL：076-262-3236　FAX：076-262-1836
E-mail：rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp
https://ishikawa-rekihaku.jp/

広告

**石川県立歴史博物館「石川 れきはく」に広告を掲載してPR**
サービス・集客
**しませんか？**

れきはくメイト(友の会)会員、学校、博物館、図書館、その他公共施設へ **配布!!**

ターゲットを狙った知名度向上

石川県立歴史博物館の信頼度の高い広報媒体

お問い合わせは　株式会社ホープ ☎092-716-1401
福岡県福岡市中央区薬院1-14-5 MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場　財源確保　検索